







Photo.05

染付御所車蒔絵大花瓶  
(有田ポーセリンパーク蔵)

約200cm (六尺二寸) ある大きな花瓶は、博覧会の日本館内部を撮影した写真にも写っている。会場でも存在感のある出品物であったことがうかがえる。



Photo.06

金属製灯籠 ©Sandro E. E. Zanzinger  
(レオポルトシュタット地区博物館蔵)



Photo.07

木製人形  
(ウィーン大学東アジア研究所日本学科蔵)

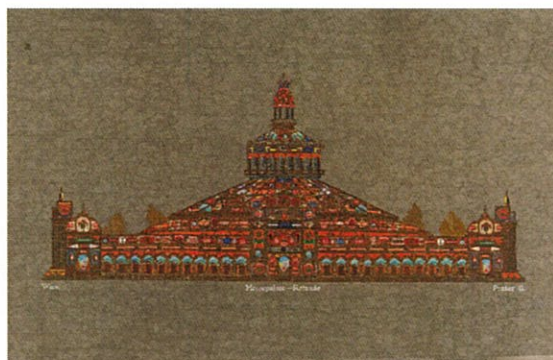


Photo.08

©Sandro E. E. Zanzinger  
シガーリングのコレクションによるロトゥンデ  
(JTIオーストリアコレクション)

シガーリングを貼り合わせて博覧会のシンボルパビリオンであるロトゥンデを形づくっている作品。



Photo.09

装飾メアシャムパイプ  
(JTIオーストリアコレクション)

豪華に装飾されたゴシック建築の塔の形をしているメアシャムパイプ。ウィーン万国博覧会のために制作された。

©Pedro Salvadore



Photo.10

装飾メアシャムパイプ  
(JTIオーストリアコレクション)

アジア、オーストラリア、アメリカ、アフリカの4つの大陸を具現化した4人の人物が担ぐ地球の上に、ヨーロッパを具現化した女性が、芸術と科学の指導者として君臨するかのよう表現されている。

©Pedro Salvadore



Photo.11

記念カード  
(レオポルトシュタット地区博物館蔵)

各パビリオンなどの写真をカードにした土産物。日本庭園を写している。

©Sandro E. E. Zanzinger



### 3、ウィーン万国博覧会後の日本

ウィーン万国博覧会では、日本の豊かさと技術力の高さを世界にアピールすることに成功しました。特に工芸品の分野の評判は高く、輸出産業として発展させるための組織づくりや製作技術の見直しが模索され、そこでは万博に派遣された技術伝習生たちが貢献しました。また、国内産業の育成や在来産業の技術改良には、技術や商品の品質を競う国内での博覧会の開催やその基礎となる博物館が必要だと認識するようになりました。この動きはやがて、内国勸業博覧会の開催、さらには博物館の設立へと繋がりました。

展示では、「ウィーン万国博覧会後に日本がどのように変化していったか」を示す、報告書や工芸品、内国勸業博覧会の様子が描かれた浮世絵などの資料を展示します。

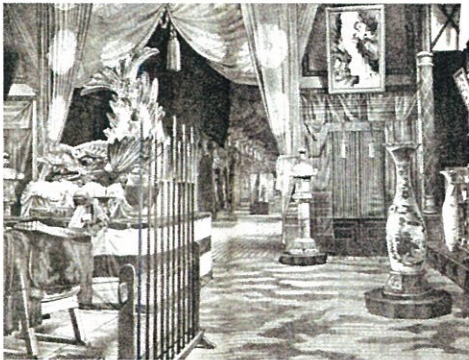


Photo.12 「澳国博覧会参同記要」  
明治30年〔1897〕8月  
(東京大学経済学部資料室蔵)

ウィーン万博への参加経緯のほか、ウィーン万博の会場や日本館を描いた銅版画なども収録された報告書。



Photo.13 旭焼 釉下彩山水図皿  
(東京工業大学博物館蔵)

ウィーン万博参加時に顧問として活躍したゴットフリート・ワグネルが開発した釉下彩陶器。

Photo.14

「大日本内国勸業博覧会製糸器械之図」  
二代歌川国明画 明治10年〔1877〕 (個人蔵)

内国勸業博覧会では製糸器械の実演などが見学でき、人気を集めた。



### 特別展示 クリムト作品

ウィーンやパリなどで開催された万博で日本の美術工芸品や浮世絵が展示されるようになると、ヨーロッパに日本趣味＝ジャポニズムが広まっていきました。本展では、日本の芸術から大きな影響を受けた世紀末ウィーンの画家グスタフ・クリムトの習作2点を特別展示します。



Photo.15  
「キモノを着た女」  
(油彩画「リア・ムンクの肖像 III」のための習作)  
1917-1918年 (個人蔵)



Photo.16  
「毛皮をまとった婦人」  
(油彩画「毛長イタチの毛皮」のための習作)  
1917年 個人蔵